

Title	哲学の基礎領域について
Sub Title	Über die fundamentale Region der Philosophie
Author	大谷, 愛人(Otani, Hidehito)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1971
Jtitle	哲學 No.58 (1971. 12) ,p.211- 230
JaLC DOI	
Abstract	Diese Abhandlung stellt sich die Aufgabe, die fundamentale Bedingung der Philosophie zu analysieren und zu beleuchten. Die fundamentale Region der Philosophie ist wesentlich entweder mit der Ironie oder mit dem Humor bedingt. Diese Untersuchung andeutet die Wahrheit dass die Philosophie mit dem Humor welt-und menschebejahend funktionieren soil. Man kann den Begriff des Humors bei vier Thesen andeuten. 1. Der Humor ist der Standpunkt der bis an die aussersten Grenzen durchfuhrten Ironie. 2. Der Humor hat die Sympathie in sich. 3. Im Humor ist das Leiden verborgen. 4. Der Humor beruht auf der Tiefe des Bewusstseins des Leidens : der Zweifel, die Verzweiflung und die Schuld.
Notes	名誉教授宮崎友愛先生記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000058-0219

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

哲学の基礎領域について

大 谷 愛 人

はじめに

哲学は他の諸科学と異って自らの前提を批判することを重要課題としてきた。しかし今日ではこの課題は従来のスケールで扱われることは許されない程の重要性と大きさをもっている。そこでこの小論は前提という言葉で言っただけのけられた部分を基礎領域という概念でとらえなおし、従来とは異ったスケールで考察するわけである。そこで何よりもまずその基礎領域とは何かということが問題になるが、それについての直接的な説明をより一層鮮明にするために、それに先立って何故この問題が今日特別に重要性をもっているのかという理由を述べることから始めたいと思う。その理由は二つある。

第一に、今日多くの哲学が見せているその機能の不条理性という点である。今日の人々は人類が哲学という営みを始めて以来非常に永い歴史のはてに立っている。そのため歴史の中に新たに登場してくるさまざまな哲学や思想が必ず迎える運命の行程を過去の人々とは比較にならない程に多数の実例を通じて知らされている。一つの形容が許されるならばそれは繰返されるサイクルを眼にするようなものだと言ってもよからう。ところでこのサイクルの一つにあたるものが哲学の機能の不条理性である。例えば、真理の体系であった一つの哲学が新しい虚偽になったり、人間疎外の克服を目的とした一つの哲学が新たに人間疎外の原因となったり、平和を旨とした一つの哲学が新たに戦争をつくり出すものとなったりする点である。従来このような不条理は極めて簡単にあしられる傾向にあったが、私はこ

哲学の基礎領域について

れに関して考えらるべき三つの問題があるように思う。第一は、このような不条理の原因はそれらの哲学に関かわる人間自身の方に誤りがあるためか、第二は、それらの哲学が時代や場所を異にすることによってそれらのもつ意味が変質してしまったのか、第三は、前二者との深い関係も含めてであるが、それらの哲学は、それらを生み出した哲学者たちの善意にも拘らず、最初から本質的に何かデモーニッシュなものを含んでしまっていたのか、という問題である。これらはいずれも大きな問題であるので軽々しく扱うことはできない。そこでその中のどれか一つに限定した方がよいと思うが、私は今まで余り顧みられなかった第三番目の問題を重視したいと思う。ところでこの問題は更めて考えるならそれら哲学の体系自体や思想内容の問題ではなく、その哲学の質の問題、その哲学の質を規定しているものとその規定のされ方自体の問題、つまり哲学の基礎領域の問題になってくる。

第二に、これからの時代に充分対応しうる哲学の機能の条件という問題からである。今日という時代が、即ち過去とは全く変質しつつあるこの時代が、哲学の機能に要求する条件は少くとも次のようなものであろう。まず第一に、社会の構造と時代の性格の本質的な変化に伴いそこに出現してくる新しい「質」に対する適格なる認識能力である。第二に、それはこの質という概念との関係において当然に問題になってくるものであるが、直接的な仕方での命題化や伝達を不可能にする本質的に内面的な質に対する透徹した洞察力である。第三に、従って、質と質との差異或は対立を明確に識別し、処理しうる能力である。このような「質」の問題というのは同一の基準や同一の尺度やまた一つの標準によっては到底計りえない性質のものである。そしてまたその「質」はさまざまな種類の設問方式を通じて露わになってくるものでもある。とするならばこれからの哲学には、従来多くの哲学に見られたような自分の設問方式だけを絶対化し固定化し、新しく起ってくる問題に対してはその設問方式自体を踏みつぶしてしまった

り、自分の設問方式に組み込んでしまったり、また一つの思想に絶対的根拠をおいたり、単に「思想」という次元で世界と人生の全問題の解決をはかろうとしたりするようなことは到底許されず、そのような在り方は根本から変えられる必要がある。つまりこれからの哲学は思想への癒着の故に起るそのような在り方とは正反対の在り方が要請されるのではなからうか。即ち、これからの哲学には、人間の思考及び精神を限りなく自由にし、それらが対象のもつ問題の深さだけ深く、またその広さだけ広く働きうるようにしむける機能が期待されるべきではなからうか。いずれにせよ以上の説明からもそのことはもはや哲学の思想内容の問題よりもその質を規定する基礎領域に関する問題であることは明らかであろう。

ところでこの二つの理由から洞察されうることは、哲学は、現実世界に対しては、論理体系や思想内容によっていはば外面的関係を取り結んでいるのとは極めて異った仕方で実は内面的関係を取りむすんでいるということである。しかも後者の関係の方が根源的と考えられるのである。

さて、ここで哲学の基礎領域という言葉の意味が明らかになってくる。それは、哲学が「現実」の全体に対してとっている根源的関係をめぐる問題領域ということである。しかし哲学が関係をむすぶその「現実」は幾重にも層をなしている深いものである。それは少くとも三つの層に考えられる。まず表面層としての現象的現実、次にその奥に或は背後に隠れた本質的現実、更にそれら両者とはまた異った次元である人間の意味的現実とである。そしてこの人間の意味的現実に対してこそ哲学はそれら現実の各層を貫いて根源的関係を取りむすんでいるのである。そこで問題は、その根源的関係とはなになのか、ということである。それは要するに「イデーと現実との関係」である。この関係の問題は従来は弁証法の問題として扱われてきた。しかしこの問題が単に弁証法の問題として扱われるとき、それは、この基礎領域からぬき出されて、それ自体として外面化されてしまう。そのためそれは本来の問題性を失った極めて抽象的なものに化されてしま

ったわけである。そこでこの「イデーと現実との関係」の問題は、それ本来の根源性において、つまりその本来性において問題にされることが必要である。その場合この問題は単なる弁証法の問題として扱われることによって抽象化され失った現実性をとりもどすことから始められるのでなければならぬ。ところでそのような観点からこの「イデーと現実との関係」を考えると、その関係の規定となっているものを現わす二つの概念を手がかりにすべきことがわかる。その二つとはアイロニーとユーモアとである。いかなる哲学も必ずこのいずれかの規定をうけている。

ところでこの小論が哲学の基礎領域を問題にするのは、哲学がアイロニーの規定のもとにあるとはどういうことか、また、哲学がユーモアの規定のもとにあるとはどういうことかを考察し、哲学のあるべき姿を求めるための基礎作業の一助たろうとするためである。

一 アイロニーによる規定

アイロニーによって規定された哲学とはどういう内容のものを指すのかを知るにはアイロニーそのものの本質を知らなければならない。しかしアイロニーの定義に関しては既に本誌第56集で述べたのでその詳細はそこにゆずるとしてここではあくまで本小論の論旨に即して述べてみることにする。アイロニーの本質は次の三つにまとめられうる。

第一に、アイロニーは無限にして絶対的な否定性である。この「無限にして絶対的な否定性」ということは現実の全体、現存在の全体を「むなしのもの」とすることであるが、それは単なる否定ではなく、現実や現存在がもととする「絶対性」に対する否定なのである。キルケゴールは次のように言っている「それは否定性である。なぜならそれはただひたすら否定するだけだからである。それは無限的である。なぜならそれはあれこれの特定の現象を否定するのではないからである。それは絶対的である。なぜならアイロニーがそのものの力によって否定する当のものは決して現に

存在はしていない高次のものだからである。アイロニーは何ものをも立てない。なぜなら立てらるべきものはアイロニーの背後にあるからである。⁽¹⁾と。つまり、アイロニーは現実或は現存在の全体を「絶対性」としてとらえそれをひたすら絶対的に否定してゆくものである。従ってアイロニーは「神的な狂気」et guddommeligt Vanvid⁽²⁾ または「神の嫉妬」den guddommelige Misundelse⁽³⁾ と呼ばれる。というのはアイロニーは偉大なものや秀い出たものに対してだけ嫉妬をもつものでなく、微賤のものやとるに足りないものに対しても同じだけ嫉妬するからである。アイロニーに「神的」という言葉が使われることは非常に相応しい。というのは無限も絶対も神の属性だからである。そこでキルケゴールはそのようなアイロニーの運動を更に「与えられた現実を断罪する」fordømmer den givne Virkelighed⁽⁴⁾ という言葉で表現している。従ってアイロニーの立場をとるということは人間が「神的正義」を先き取りしてしかもわがもの顔している立場である。さて、このようにアイロニーは何ものをも立てないが、それでは本当に立てらるべきものは何もないのかというに、そうではなく、それはアイロニーの背後にあるのである。それは次に述べる規定につながる。

第二に、アイロニーは主体性の規定である。しかしアイロニーが主体性の規定であるということはアイロニーは主体性の本質であるというような意味ではない。それはキルケゴールの次の定義に現わされている。「アイロニーは、無限にして絶対的な否定性として、主体性のもっとも軽くもっとも微かな徴^{しる}である。⁽⁵⁾」即ちここに言う主体性というのはいわゆる主体性のことではなくそれは最も厳密な意味における「質」のことであり、新しい「質」のことである。つまりアイロニーは現実の全体、現存在の全体を破壊させることによって新しい質的規定へと至る運動を意味する。しかしアイロニーそのものが質なのではなく質の微かな徴なのである。キルケゴールはこの典型的な事例をソクラテスに見る。即ちキルケゴールはソクラテスの立場をアイロニーの立場と規定し、その弁証法を「抽象的弁証

⁽⁶⁾法」とか「単なる否定的弁証法⁽⁷⁾」と名付けている。それは量的諸規定そのものを越え出ようと努力するが、どうしても新しいものに関してはそれをその抽象的形式においてしか、或はそれら量的諸関係の単なる否定においてしか所持することができない弁証法だということである。⁽⁸⁾キルケゴール自身は、外面の現象的現実から主体の隠された現実へと侵入しようと試み、その試みの中でアイロニーを知ったが、それは、アイロニーはその侵入の過程のはじまりを意味するものだ、ということであった。⁽⁹⁾しかしアイロニーは普通人々にはこのように正確に厳密にとらえられていないところにそのアイロニーたる所以がある。

第三に、アイロニーは優越性を本質としている。キルケゴールはアイロニーが自らの姿を隠してお高くとまる性格を「或る種の高貴さ」en vis Fornemhed⁽¹⁰⁾と呼んでいる。彼は言う「アイロニーにはもう一つの特有の性質がある。それは、理解されたいとは思いつつも、だからといってそのまま直接的には理解されたくないと思うところからでてくる或る種の高貴さがあることである。そのためそのアイロニーによる言い方は、誰もがすぐ理解できるようなすなおでまともな言い方を見くたすようになる。それはいわば高貴な人の^{しのび}微行の道中のようなもので、そのお高くとまったところから、徒歩で行く普通の言い方を憐みながら見くたす⁽¹¹⁾」のである。このことは更に端的に言うならば、アイロニーの本質は「優越感」にあるということになる。既に第一と第二で述べたことは正にこの特質に集約されるといってよい。ところでアイロニーの本質はそれを笑いの立場において考察するとき最も明らかになる。アイロニーとは「優越的な笑い」の立場である。

以上三つの特徴をあげたが、アイロニーのアイロニーたる所以はこの三つが統御された仕方ではなく奔放に働く点にある。そのためアイロニーは本質的に優越性の立場としてのみ機能する。そこで結局のところアイロニーは「自己主張」の立場、「自己主張による他者否定」の立場になる。しか

しそれは極めて巧妙な仕方で行われる。つまりアイロニーの主体は自分を相手や対象に対してぐっと優越した位置においておき、相手や対象をいかにも肯定するふりをして実際は徹底的に否定する仕方である。従ってそれは「自己絶対化」の運動になっている。つまり、アイロニーが否定しようとするのは、現実の全体であり、即ち現実の全体がもとうとする「絶対性」に対してであるが、アイロニーはその「絶対性」を無限に絶対的に否定してゆく間に自ら自己矛盾におちいってゆく。つまり自らがその絶対的運動に化し否定すべき筈の「絶対性」に化してしまう。即ち、アイロニーは本来は何ものも立てず立てらるべきものはその背後遠くにある新しい質であるのだが、現実においてはその新しい質に代って、否その前面にそれをさえぎって「絶対性」を新たに進出させてしまう。これがアイロニーである。

ところで従来の非常に多くの哲学が、その外面はともかく、このようなアイロニーの規定を本質的にうけているように思える。また、哲学をする者がアイロニーを意識しないならば自らがアイロニーの虜になり、アイロニーの奴隷になり、今述べたような運動を行うことになる。キルケゴールは言う「もし人がアイロニーのうちに動めいている無限性を知らないでいるとするならば、彼はアイロニーを支配しているのではなく、アイロニーに隷属しているのである。同様のことは、生の弁証法が見のがされる場合にもいたるところで行われる。⁽¹²⁾」

そこで問題はアイロニーにそれ本来の働き、つまり絶対性を否定し、新しい質の進出を促進する働きをさせるにはどうしたらよいかということになる。キルケゴールによるなら、それは、アイロニーを支配すること、アイロニーを統御すること、即ち、アイロニーを統御された契機として用いることだという。つまり統御された契機としてのアイロニーこそがアイロニー本来の働きを果すことができる、という。その方法はアイロニーの中に動めく無限性や絶対性を知ってアイロニーを他人や対象に向って機能させるだけでなく、自分自身に向ってつきつけてみることである。⁽¹³⁾ キルケ

ゴールはこの件を作家の場合と思想家や哲学者の場合に即して考察する。

まず作家に関してはドイツ・ロマン主義の美学者ゾルガー Karl Wilhelm Ferdinand Solger (1780-1819) の言葉を引合に出しながら、作家とその作品との関係に即して述べる。キルケゴールは言う「作家は自らの作品に対してアイロニー的な態度をとるべきである⁽¹⁴⁾」と。しかしこのことはその作品の実質的内容をますます揮発性をましてゆく昇華物へと蒸発させることではなく、その模範がシェイクスピアの場合に見られるように、その抒情詩がときには狂気にまで高まってゆく場合でも、実はこの狂気の中にこそ或る異常な度合において存在する客観性を目ざすのである。要するに「自らの作品に対してアイロニー的な態度をとるということは、その作品をして客観的なものに支配させようとする⁽¹⁵⁾ことである。」これが「統御された契機としてのアイロニー」であり、この意味でのアイロニーは作品の到る所に現在すべきであり、それによってその作品は真の詩的作品となる⁽¹⁶⁾という。しかしこのことが行われうるには作家自身がアイロニーの支配者でなければならない⁽¹⁷⁾という。そしてそれには作家は全体的な世界観をもち、己れの個人的な実存においてアイロニーの支配者でなければならない⁽¹⁸⁾、要するに或る程度まで哲学者であることが必要だ⁽¹⁹⁾という。こういう作家は個々の作品に己れ自身の発展の一契機を見るのであり、ここにこそ「統御されたアイロニー」が生きているという。そしてキルケゴールはこの代表的な実例をゲーテ⁽¹⁹⁾となす。

次に思想家や哲学者の場合も殆んど同じである。しかしその場合アイロニーは「懐疑」という形をとって生息する。「懐疑なくしては哲学はありえない⁽²⁰⁾」。しかし「懐疑」の中に動めくアイロニーを知らずにいる者、それを支配し統御しない者は、独裁的に暴れまわろうとする懐疑の精霊どもの荒々しい無限性に隷属することになる。壮大なる哲学体系（ヘーゲル）もいつ果ることもない徹夜の哲学論争もそれはアイロニーの精霊の独裁的な暴れまわりへの隷属を意味する。それ故アイロニーは自覚され統御されな

ければならない。「アイロニーは、それがあらかじめ統御された場合は、それが統御されない場合にその生を現わすのとは正反対の運動を行うものである。そのアイロニーは、制限し、有限化し、限定し、そしてそれによって真理と現実性と内容とを与える。そのアイロニーは、懲戒し、罰し、そしてそれによって背骨と賢実さとを与える。アイロニーは、それを知らないものだけには恐れられるが、知る者には愛される厳格な教師である。アイロニーを少しも理解しない者、アイロニーのささやきに聞く耳をもたない者、その人はすでにそれだけで人格的生活の絶対的な端緒と称するものを欠いている。また彼は人格的生活にとって一瞬たりとも欠くことのできないものを欠いている。⁽²¹⁾」このように哲学がアイロニーを知らないとするならばそれはそら恐ろしいことである。

それではアイロニーを知り、それを支配し、それを統御された契機たらしめることはどのようにして可能だろうか。それは極めてアイロニー的なことであるが、それはアイロニーの立場に立っている限り不可能だということである。アイロニーは「優越的な笑い」の立場であり、高い所からこの地上のもの一切を笑い否定する立場であった。しかしアイロニーはそう見せておきながらただ一つのものだけは笑わず、否定せずにおく。それは自分自身、アイロニーの主体自身である。これだけはこのこしておく。従ってここにこそ甘さがあり、この甘さはアイロニーの運動の一切を全面的に虚構に転ずるのである。自分も現実の一部ではないのだろうか。自分も笑わべきものの中の一つではないだろうか。この虚構がアイロニーの背後に立てらるべき新しい質、つまり「真実」の前に立ちはだかる。それ故人が「真実」に達しうるためにはこの虚構をとりのぞかなければならない。それにはアイロニーの主体自身を笑う立場、即ちアイロニーを更に徹底化した立場が必要である。キルケゴールはそれをユーモアの立場と呼んでいる。アイロニーの本来的な機能はユーモアの立場においてのみ可能となる。「アイロニーの永遠の妥当性の問題があるとするれば、この問題は人がユーモ

アの領域へと入ってゆくことによってはじめてその解答を見出すことがで
⁽²²⁾
きる。」

二 ユーモアによる規定

キルケゴールにおいてアイロニーは本質的に自らを貫徹する性質のものであった。アイロニーを徹底化した立場これがユーモアの立場であった。この件に関し彼は次のように言っている。

「ユーモアとは、その振動が最大限にまで徹底的に行われたアイロニーのことである (1837・8・4).」⁽²³⁾

「そのようなものとしてのアイロニーの立場は、何ごとであれ賛美しない、という立場である。けれどもアイロニーは、それが自分自身を殺すときは、自分自身をも含めて一切のものを、ユーモアによって軽蔑するのである (1837・6・2).」

「ユーモアの人、体系哲学が決して体系においては計ることのできないものに眼をむける。……ユーモアの人、充実において生きようとするのである。従って彼が、もっとも幸福な気分で語ったものでも、それが不断にどんなに多く自分に遡及してくるかを感じるのである (1837・8).」⁽²⁵⁾

「アイロニーは客観精神の陣痛である(それは自我によって発見されたところの「実存」と「実存のイデー」との間の食い違いに起因する)。

ユーモアは絶対的精神の陣痛である(それは自我によって発見されたところの「自我」と「自我のイデー」との間の食い違いに起因する).」⁽²⁶⁾

キルケゴールはユーモアをこのように位置づけている。

さてこのように位置づけられたユーモアにはむしろアイロニーとは正反対の特徴がいくつかみられる。次にそれについて述べよう。

第一に、ユーモアは共感性を本質としている。アイロニーの本質は結局のところ優越性にあり、それは「優越的な笑い」の立場であったが、これに対してユーモアの本質は共感性にあり、それは「共感的な笑い」の立場

である。キルケゴールは言う「アイロニーには共感というものが含まれていない。アイロニーは自己主張だからである。しかしユーモアには共感が含まれている」⁽²⁷⁾と。それではその「共感性」「共感的な笑い」は人間のどのような在り方から起るのだろうか。ここにこそユーモアの更に深い特徴が問題となってくる。

第二に、ユーモアには苦悩が隠されている。キルケゴールは次のように言う。

「ユーモアの中にはつねに苦悩が隠されている。それだからこそユーモアの中にはまた共感というものがある。……ユーモアの人が語る時に涙と笑いとが同時に誘われるのは、彼の内部につきささっている苦悩の痛みとしかもそれが転じられたものとしての宜談とのこの二つの故である。」⁽²⁸⁾

「アイロニーは自己本位である。アイロニーは俗物性と闘うが、にも拘らずそれをもち続ける。たとえアイロニーは、丁度小鳥がさえずりながら舞い上ってゆくときと同じように、空中高く上昇してゆき、少しずつ背中の重荷を投げすててゆき、そのところでその俗物性が『自己本位な悪魔よくたばれ』という言葉をもって終る危険の中を走っているとしてもである。なぜなら、アイロニーは、個人が自己自身をアイロニーの照明の中で見つめる際に、自分自身を見つめているがために、いまだに自分自身を打ち殺せずにいるからである。しかしユーモアは抒情詩的である。それは最も深い生の真剣さである。しかし抒情詩という形をとることができないので、もっとも奇異な形式をとって現われているところの詩になる。それは流れ去ることのない黄金の鉱脈であり、より高い意味での苦悩発作である」⁽²⁹⁾
(1837・7・6).」

「アイロニーの人がユーモアの人の機知や着想を一笑に付して問題にしないとき、それは、ハゲタカがプロメテウスの心臓を食ってゆく場合と同じようなものである。なぜなら、ユーモアの人の着想はきまぐれのおとし子ではなくて、苦悩から生れた息子たちであり、彼のもっとも深いところ

にある心臓はその息子たちの小さい心臓と共に活動しており、しかもこのユーモアの人の深い絶望を必要とする者は、その痩せ細っているアイロニーの人だからである。……ユーモアの人の笑いとその眼差しは、心の中ではそのような人間の惨めさに泣いていることを現わしているのである(1837・10・11).」⁽³⁰⁾

「私は思うのだが、人は苦しめば苦しむほど、ますます滑稽さへのより豊かな感覚をもつようになるものだ。もっとも深い苦悩を通じてはじめて人は滑稽さにおける真の権威というものを獲得するが、この権威は、人間と呼ばれている理性的生物を、魔法の一撃によって、漫画に変えてしまうのである。」⁽³¹⁾

このようにユーモアは、「共感的な笑い」の立場は、深い苦悩からはじめてでてくるものである。しかしその苦悩には浅いものから非常に深いものまである。従ってユーモアは精神の深さに即している。

第三に、ユーモアは、懐疑、絶望、そして負い目の意識に基いている。これは苦悩の深まりを示す概念である。

「ユーモアは、アイロニーよりはるかに深い懐疑を内含している。なぜならユーモアにおいては、一切のことが、有限性をめぐってでなく罪性をめぐって動いているからである。ユーモアの懐疑がアイロニーの懐疑に対してとる関係は、無知が《不合理なるが故に私は信ずる Credo quia absurdum.》という古い命題に対してとる関係に似ている。」⁽³²⁾

「アイロニーとユーモアとは自分自身を反省する。それ故に無限の諦念の領域を自分の住家とする。」⁽³³⁾

「ユーモアの色合いとは、背後にひかえた永遠なる決定性のもとで、全体的なものを無限に撤回してゆくことである。」⁽⁴³⁾

「ユーモアは、人と人との間に相対性を設定すると共に負い目を全体的に設定することによって、喜劇的なものを発見する。喜劇的なものは、全体的な意味での負い目というものが根底にあるということがらの中にある。」⁽³⁵⁾

「ユーモアの一切のものと一緒に負い目の意識の永遠の想起を設定するが、自らは永遠の至福に関係しない。こうして今やわれわれはユーモアにおいて隠された内面性のそばに立つのである」⁽²⁶⁾

ユーモアの特徴は以上三つにまとめることができる。つまりユーモアとは、自分ひとりだけを優越の高みに置きそこから他者の一切を眺めて笑うアイロニーとは非常に異り、自分もそれら一切の他者と同質のもの同列のものであることの深い自覚のもとに、自分もそれら一切の他者と同じに笑われるべき位置におき、自他共に笑い合う立場である。従ってその「共感的な笑い」の根底には共に「人間である」ということの意識が横たわっている。しかしこの意識は「神」になれないことからくる苦悩の意識である。従ってこの意識は深まれば深まる程「絶望」の意識となってゆく。それは人間は「人間」でしかありえないということの、つまり「神」にはなりえないということの「負い目」の意識である。ユーモアとはこのような「絶望」と「負い目」の意識に深く根差しているのである。

そこでユーモアとは、自己をも含めて現実の全体を、現存在の全体を、つまり自己をも含めてこの世にある事物の一切を、相対化する立場である。ユーモアにおける「共感的な笑い」の中に動めいている運動は、相対化という名の運動である。アイロニーは相手方をいかにも肯定するふりをして実は根本的に否定するが、ユーモアはいかにも否定するふりをして根本的に肯定する。このようなところからデンマークでは一般に、アイロニーとは真面目 Alvor の背後にある宜談 Spøg のことであり、ユーモアとは宜談の背後にある真面目というふうに考えられている。しかしコペンハーゲン大学哲学教授 S・ホルム Søren Holm はこの定義は不十分であるとなし、両者の構造形式を次のように述べた。即ち、アイロニーは、真面目——宜談——真面目であり、ユーモアは、宜談——真面目——宜談である、となした。⁽²⁷⁾しかしこの「宜談」を「相対化」の運動として理解するならば、アイロニーの場合はその相対化は二段階のところまで終っており、三段階目の

哲学の基礎領域について

領域はそこから相対化が行われる絶対性の領域になる。つまりそこでは自己は根本的に絶対化されることになる。これに対してユーモアの場合は三段階目の領域、つまり自己も根本的に相対化されることになり、その運動の全過程が、運動そのものが「相対化」の運動ということになる。

もしこのように理解することが許されるとするならば、ここには更に次の重要な問題がでてくる。それは一応二つに分けられるが、見方によっては一つにもなる。

第一に、この「相対化」を価値付けるものは何か、この「相対化」は何によって価値付けられているのか、という問題である。要するに、この「相対化」に意味を与え、その有効性を基礎付けるものは何か、という問題である。

第二に、このように相対化が行われる以上それは必ず何かとの関係において、或は、何かに対して行われている筈であるが、それは一体何かという問題である。

この二つの問題は結局は一つのことを意味していると言ってよい。とくにキルケゴールはこの問題を一つにし極めて明確な見解をのべている。つまり彼はこの相対化を絶対者、或は絶対的価値との関係において成立するものとなし、宗教的意味をもたせている。即ち、キルケゴールにおいては、アイロニーは美的なもの与伦理的なものの境界線をなすが、ユーモアは倫理的なものと宗教的なものの境界線をなすと言っている。彼は次のように言う。「ユーモアは、内在性の内部で内在性を終息させるものであり、本質的にはなおも想起によって実存から永遠的なものへと後退することのうちに⁽³⁸⁾ある。そしてそこにおいてはじめて信仰と逆説とがはじまるのである」と。このようなキルケゴールの見解はとにかくとしても、この「相対化」という運動においてユーモアが果す機能は非常に値いの高いものである。

第一に、ユーモアは人間も含め現存在の全体の肯定の根拠となる。

第二に、ユーモアは人間の主体性の相互的成立のための、即ち、主体性

が相互主体性という仕方で成立するための根拠となる。要するに、主体性が真に成立するのはユーモアにおいてであるということである。

第三に、ユーモアはつねに新しい質への知を含み、量と質の対立を自覚の中にうけとめ、異質のものとの対立の内部にある衝突の根本を洞察することができる。即ち、既に述べた現代の哲学に課せられた課題を遂行することができる。

ユーモアにおける相対化という運動にはこのような厳粛な意味が含まれているのである。

さて、ユーモアというものがこのようなものであることを知るなら、ユーモアに規定された哲学のみが本物の哲学であることがわかるであろう。

そこで最後に問題になるのは、一つの哲学なり思想なりがユーモアに規定されているかどうかをどのようにして発見するかという問題である。それはその哲学なり思想なりを貫く「真理観」にあると言ってよかろう。「真理」を絶対性としてとらえ、自らを唯一の絶対的真理として通そうとする哲学や思想はアイロニーの悪霊が暴れ廻っているものと見てよい。これに対して「真理」をそれは必ずその対立物である虚偽を許容しなければならぬものとし、「真理」の中に虚偽の場所を設ける見方や、「真理」の理論は常に反証可能の形で提出さるべきものとして、「真理」という概念の中にむしろ反証を含める見方を基本としている哲学や思想は明らかにユーモアに規定されていると見てよい。

む す び

このようにみえてくると、従来の哲学の実に多くが統御されないアイロニーの運動に委ねられていたものであることがわかる。それらは体系という形をまといかにもアイロニーを統御しているかのようであるが、その体系は、アイロニーの統御をしているのではなく、無限にして絶対的な否定性を、要するに虚無を内実として、その論理的正当化をはかっている

かのようにすら考えられる。キルケゴールがヘーゲルの論理学体系をかくも激しく攻撃したのは、決して論理学そのものの否定だったのではなく、その論理学体系が思惟の内部にだけとどまることをせずそれをこえて存在の全領域を覆い存在の全体であろうとしたことにより「絶対者」にまでなった点にある。その「絶対者」としての論理学体系はもはや全くの虚構となる。キルケゴールはヘーゲルの哲学体系をして虚構たらしめたのは、ヘーゲルにたった一つのものが欠けていたからだとなす。そのたった一つのものとはユーモアである。もしユーモアがあったならその弁証法の論理は何よりもまず自らの限界を知る作業をした筈だし、もしそうならヘーゲルはその弁証法の論理の妥当範囲は「思惟」の内部だけに限られることを謙虚に認めたであろうというのである。ところがヘーゲルにはユーモアがなかった。そのため彼はアイロニーに隷属し支配され虚構の体系を築くことになった。こうして彼の意識は「絶対者の意識」となった。当時デンマーク・ヘーゲル主義者たちは皆若きエリートたちであった。彼らはヘーゲルの弁証法論理を自らのエリート意識の中でとらえ、そのアイロニーの運動に身を委せ、アイロニーによる論争に明け暮れていた。それは結局のところ彼ら自身が自らの意識を「絶対者の意識」として固めてゆく以外の何ものでもなかった。若きキルケゴールもひと頃そのような状態にあり、アイロニーの論争に明け暮れていたことがあった。ところが彼はP・M・メラーやJ・G・ハーマンを通じてユーモアを知らされた。そのためそのような状態に徹底的な反省をもった。彼は日誌に次のように書いている。

「論争において、アイロニー（これはユーモアに通じてゆくが）の洪水が全世界（天と地）を覆ったため、かえってそのアイロニーが自ら小さな世界をかこうようになったとき、全世界との和解を再び始める場合には、まず鴉を飛び立たせておき、次にハトを飛び立たせる。するとこのハトはオリーブの若葉をくわえて帰ってくる（1837・11・15⁽⁴¹⁾）。」

さて、キルケゴールがヘーゲル哲学に対して述べたことは殆んどマルク

シズムにあてはまるようである。マルクシズムが人々をひきつける点は、一つの形容をもってするなら、その論理が「神的論理」の具体化であり、その倫理が「神的正義」に貫かれている点である。人に興奮を与えるのは、その「神的」の部分であり、それは人を「神」の位置に立たせることになる。そのため一般の人間の為すことはすべてなまぬるく馬鹿に見えるであろう。その「絶対者の意識」の中ではすべてが解ってしまう。つまりアイロニーの極に立つ。ここでマルクシズムにたった一つのものが欠けていることがわかる。それがユーモアである。自らも人間の理論であるが故に他の理論と同じように、同じ度合においてもっている筈の不完全性を、非科学性を他の人々と共に共感的に笑う人間的自由さをもつべく余りにも神的のようである。B・ラッセルは『西洋哲学史』の中で次のように言っている。「マルクスは自分を無神論者と公言したが、有神論だけが正常化するような宇宙的楽観観を保持していた。大雑把に言えばマルクスの哲学の中でヘーゲルから派生している要素はすべて、それが真であると想定すべき理由が全然ないという意味において非科学的である」と。

ヘーゲルやマルクスの哲学のみならず、ドイツ生れの哲学の中にはアイロニーの規定のもとにある哲学が比較的多いようである。最近ではニーチェやハイデッガーの哲学もその部類に属するものを感じさせる。これに対して同じドイツ生れでもカントやフッサールのそれはユーモアの規定のもとにあるように思える。その理由は敢て書かないことにする。またととくに日本では従来アイロニーの「優越的笑い」のもとに軽視されていた経験主義の系統につつらなる哲学の中にはユーモアの規定のもとにあるものが非常に多いように思える。

さて、このように述べてくるとき、これからの哲学がいかなる性格のものであるべきかが明らかになってくる。しかしその場合最も注意すべきことは、そのユーモアは、今便宜的に「アイロニー」と「ユーモア」というふうに分けた図式化された「ユーモア」ではなく、その本質が徹底的に

貫かれてゆくユーモア，つまりその異質の両者に「肯定」の根拠を提供しうるようなそのように大きく深い『ユーモア』であるべきだということである。

このようにみるならユーモアにおいてはじめて哲学は真の哲学になり，また科学ははじめて真の科学となることがわかるであろう。ユーモアの立場からはじめて真の哲学的態度と真の科学的態度がうまれるであろう。何故ならユーモアにおいてのみはじめて人間の思考と精神は，人間に可能な限りの自由をうるからである。つまり，少しのこだわりもなく認識可能の深さだけ深く，広さだけ広く認識しうる自由さと，その認識に伴う自らの虚偽や反証を少しのこだわりもなくすなおに認めうる自由さを持ち合わせるだろうからである。そしてその故にこそこの「自由」は人間に，その倫理的行為や行動が前述したような真の意味における科学的方法に基くべきことを要求するであろう。

レッシングは言う，「もし神がその右手には一切の真理を，そしてその左手には，私を常にそして永遠に迷わせるということわり書きのもとに，真理に向っての唯一途の永遠に止むことなき衝動を隠しもち，私に向って，どちらかを選べと言うならば，私は謙遜にその左手を押え，父よ，これを与えたまえ！ 純粹の真理そのものはやはりあなただけのものであります！ と言うだろう」と。

註

- (1) S. Kgd: Samlede Værker. XIII. (1930). S. 362.
- (2) Ibid. S. 362.
- (3) Ibid. S. 421.
- (4) Ibid. S. 363.
- (5) Ibid. S. 107.
- (6) Ibid. S. 227.
- (7) Ibid. S. 248.

- (8) G. Malantschuk: Dialektik og Eksistens hos S. K. (1968). S. 185.
- (9) Ibid. S. 184.
- (10), (11) S, V. S. 348.
- (12) Ibid. S. 425.
- (13), (14), (15) Ibid. S. 422.
- (16), (17), (18) Ibid. S. 423.
- (19) Ibid. S. 424.
- (20), (21) Ibid. S. 425.
- (22) Ibid. S. 428.
- (23) S. Kgds Papirer. II A 136.
- (24) Pap. II A 627.
- (25) Pap. II A 140.
- (26) Pap. III B 19.
- (27) S. V. VII. S. 544.
- (28) Ibid. S. 544., S. 437.
- (29) Pap. II A 102.
- (30) Pap. II A 179.
- (31) S. V. VI. S. 259.
- (32) S. V. XIII. S. 428.
- (33) S. V. III. S. 114.
- (34) S. V. VII. S. 544.
- (35) Ibid. S. 545.
- (36) Ibid. S. 545.
- (37) S. Holm: Humor. En aesthetisk Studie (1964). S. 21.
- (38) S. V. VII. S. 278.
- (39) B. Russell: The Problems of Philosophy. (1912) Chapt. 12.
- (40) 沢田允茂: 哲学の基礎. S. 140~2.
- (41) Pap. II A 195.

Über die fundamentale Region der Philosophie

Hidehito Otani

Résumé

Diese Abhandlung stellt sich die Aufgabe, die fundamentale Bedingung der Philosophie zu analysieren und zu beleuchten. Die fundamentale Region der Philosophie ist wesentlich entweder mit der Ironie oder mit dem Humor bedingt. Diese Untersuchung andeutet die Wahrheit dass die Philosophie mit dem Humor welt-und menschenbejahend funktionieren soll.

Man kann den Begriff des Humors bei vier Thesen andeuten.

1. Der Humor ist der Standpunkt der bis an die aussersten Grenzen durchführten Ironie.
2. Der Humor hat die Sympathie in sich.
3. Im Humor ist das Leiden verborgen.
4. Der Humor beruht auf der Tiefe des Bewusstseins des Leidens: der Zweifel, die Verzweiflung und die Schuld.